

嬉野のシュガーロード

長崎港と九州北部の小倉市を結ぶ全長 228km の長崎街道は、砂糖輸送の役割を果たしたことから「シュガーロード」の愛称で親しまれています。

江戸時代のほとんどの期間、長崎港にある人工島「出島」が日本の唯一の西洋との接点でした。ヨーロッパの代表的な商品である砂糖は、日本では当初薬として使われていましたが、その後、お菓子作りに使われるようになり、出島を経由して長崎街道を通して輸入されました。出島を経由して長崎街道を通して小倉まで運ばれ、京都、大阪、江戸へと運ばれました。

ヨーロッパの国々から日本全国の都市に物資や技術、文化などを運ぶ主要なルートとして栄えました。これらの輸入は富裕層の生活に大きな影響を与え、やがて日本の近代化への道を切り開いてきました。

ヨーロッパとの貿易は、シュガーロード沿いの地域社会にも影響を与えました。ポルトガルの食文化の影響は、パンから天ぷらまで、現在でも人気のある料理に見られます。また、キャラメルやカステラケーキなどのお菓子も登場し、日本人の語彙の一部となりました。1759 年、出島に砂糖の大量輸入が始まり、シュガーロードでは定期的に砂糖が運ばれていました。砂糖の人気により、現在の年間輸入量は約 2,000 万ドルに達しています。

長崎街道沿いで砂糖が手に入るようになると、郷土料理に砂糖を加えるようになり、その甘さで知られるようになりました。洋菓子を日本人の味覚に合わせ、独自のお菓子の製造方法を開発していきました。嬉野をはじめとする街道沿いの町では、18 世紀の砂糖貿易時代に開発されたお菓子を販売しているお店があります。

塩田津

塩田津は長崎街道の宿場町で、旅人が立ち寄って休憩する場所として親しまれていました。塩田津では民宿が一般的になりましたが、当時の地図には掲載されていませんでした。しかし、旧名は「塩田宿」と呼ばれていました。

西家は 18 世紀にシュガーロード沿いに菓子店を開き、嬉野のお菓子の代名詞となっている「逸口香」や「金華糖」を生産していました。

嬉野の特産品である「逸口香」は、外はカリッと、中はふんわりと空気を含んだ大きなパンケーキのような見た目をしていました。甘い香りが強いお菓子です。金華糖は江戸時代に日本で大流行した砂糖を使ったカラフルなデコレーションスイーツです。木の型に砂糖を入れて様々な形に成形したもの

で、江戸時代には日本でも人気がありました。また、結婚式などのお祝いの贈り物としても人気がありました。